

## 論文第五 イギリスの貴族・貴紳とリスボン大地震

### 第四節 貿易商ベンジャミン・ファーマーと銃製造業

#### ファーマー・ゴルトン社

一、ファーマー・ゴルトン社とポルトガル通商

二、ベンジャミン・ファーマーとリスボン大地震

## 承 前

第一節 牧師リチャード・ゴダールとゴダール・ブランフィル  
ジャクソン商会

第二節 ドラムランリック伯爵とクインズベリー公爵夫妻

第三節 収税長官フラン克蘭ドと美女アグネス・スリヤージェ

#### 第四節 実業家ベンジャミン・ファーマーと

##### 銃製造業ファーマー＝ゴルトン社

###### 一、ファーマー＝ゴルトン社とポルトガル通商

リスボン大地震に遭遇した貴紳のひとりベンジャミン・ファーマーは、バーミンガムの銃製造業、ファーマー＝ゴルトン社の幹部である。ベンジャミンが取引するマスケット銃は、ヨーロッパにおける諸民族の攻防や、アジア、アフリカ、アメリカへの拓殖と堅く結びついていた。この銃器は一四一〇年フス戦争で最初に用いられたとされる。イギリスでは王国海軍の創設者とされるヘンリー八世は、一五四五年銃製造の技術を持つ数名のベルギー人を招聘し、彼らの同業組合をロンドン塔を本拠として結成させた。エリザベス女王の治世には三七名に鉄砲鍛冶の資格が与えられ、ロンドンの同業組合に銃製造の独占権が授けられる。

一五四三年種子島でポルトガル人から入手した火縄銃は、点火方式の銃器、マスケット銃の一種である。この銃器の来歴については諸説あるが、ヨーロッパの技術を摂取して、南アジアで造られたとの見方が有力である。伝来から三二年後、千丁以上の火縄銃で装備した織田信長・徳川家康連合軍は、長篠の戦いで武田勝頼軍の騎馬隊を撃破し、天下統一への時代を切り開いた。

十七世紀にはスペイン等でマスケット銃の改良がなされ、撃鉄の先端にマッチ（火縄）ではなく、フリント（燧石<sup>すいせき</sup>）が装置される。このフリント・ロック方式の銃はまず盗賊などに愛用され、やがてヨーロッパ諸国の軍隊に調達された。

一六八八年の名誉革命によって成立したメアリー二世の共同統治は、ルイ十四世の膨張政策に抗するため、スペイン国王やドイツ諸侯と連合するとともに、国王軍の強化に努める。革命前に設立された軍需局は抜本的に再編され、性能の高いマスケット銃の開発によりとりわけ銃器の大量確保が図られた。デ・ヴィト・ベイリの学位論文『軍需局と小型兵器供給ー軍需機構一七一四年ー一七八三年』は、こうした軍需局の役割と兵器調達についてきわめて精細である。

W.W. Greener, *The Gun and its Development*, New York, 1897. pp.49, 208.

Greener, *op. cit.*, pp.66-67.

軍需局の機能をめぐりこの時期になされたもつとも重要な刷新は、小型兵器調達の構想全体のなかで、バーミンガム銃製造業に際立った位地を与えたことである。その事由は切迫した事態、イギリスがヨーロッパ 勢力均衡を維持すべき急変のため、小型兵器への需要が激増したためである。オランダ総督オレンジ公ウィリアムが一六八八年にイギリスの共同統治者として迎えられたことにより、ヨーロッパ大陸の政情がここでも重要となり、連動する状況となった。

ウォリックシャー州バーミンガムはイングランド中西部、ロンドンとリバプールの中程に位置し、鉄鉱と石炭の産地に近い。中世のたんなる市場町に十六世紀以降、沢山の鍛冶屋や刃物屋がここに軒を並べた。つぎの世紀には十七世紀にはあらゆる金属製品、すなわち刃物、鋌釘、錠前、鍋釜、農具、宝飾品などが製造され、やがてバーミンガムとその近郊はブラック・カントリと呼ばれる重工業地帯を形成する。なかでもこの地域を際立たせる銃器の量産について、W・グリナーの著作『銃とその発達』はつぎのように述べる。

バーミンガムの銃製造工業を明確に確認できるのは、一六八三年からであつて、この年ウォリックシャー州選出のイギリス議会議員リチャード・ニコデイゲイト従男爵は、政府からマスケット銃調達の権限を委託され、バーミンガムの鍛冶職人が当局と契約を結ぶよう、激励するとともに資金を援助した。この契約が認可されると、ロンドンの同業組合は憤懣やるかたなく、議会に異議を申し立てたため、「軍需局での再検討」が必要となった。しかし、バーミンガムの鍛冶職人は注文以上に銃を調達できる実力を発揮し、美事一カ月でマスケット銃二百丁を造り出した。

---

De Witt Bailey, *The Board of Ordnance and Small Arms Supply : The Ordnance System, 1714-1783*, University of London, 1988. p.29.

大河内暁男著、近代イギリス経済史、岩波書店、一九七一年。四、一四一―五頁。

Greener, *op. cit.*, pp.208-210.

一七〇一年スペイン継承戦争への突入を転機に軍需品への需要が激増し、バーミンガムでは炯眼な業者が金属製造から銃製造へ転進した。ファーマー家の銃製造も同市の中心、オールド・スクエアの近くで始まる。この区域はフランシスコ会修道院の由緒ある遺蹟であつて、十八世紀初めこの広場には切妻、付柱、玄関など風格ある建築が、整然と十六棟配されていた。銃製造業の設立と発展はダウイド・ウィリアムスの論文「ジエイムズ・ファーマーとサミエル・ゴルトナー」八世紀中葉における軍需省調達の銃製造の実情」で委細に考察されている。

プリストルのクエイカー教徒ジョゼフ・ファーマーは、鋳物師から鉄砲鍛冶に転じ、一七〇二年バーミンガムの中心地オールド・スクエアで開業した。一七〇八年までに彼はまず軍需局への兵器完成品の調達者、ついで銃器・銃身の調達者となった。一七一七年から一七二〇年にかけて軍需局はロンドンとバーミンガムに小型兵器の二元的な供給源を設立した。

ジョゼフは意欲的に業務を拡張する。一七一七年彼はヴァージニアを訪れて、鉄鋳を調査し、一七二〇年三月には北米ポリテイモア諸州において溶鋳炉、鍛冶場、製鉄所に設置するよう、製鉄業者と合意した。同年彼はバーミンガム＝ディグベスで工場を借り、釘鋳の製作所も造った。

一七二一年ロンドン銃製造業組合のウィリアム・ブレイザーは、バーミンガムのファーマーに「連射式銃」を売却し、業界に損害を与えたとして譴責を受けた。しかし、兵器業は好調である。軍需局へジョゼフ・ファーマーは一七二三年に銃剣式マスケット銃を一九〇丁納入し、一七二八年から翌年にかけてはマスケット銃身四四〇〇丁、銃発射装置を一五〇〇個調達する。この間に彼はオールド・スクエアの自宅を保持したまま、バーミンガムの新開地に業務を移転させた。

一七三四年ジョゼフ・ファーマーの娘ハンナは金属加工業者のロバート・ゴルトンと結婚し、この血縁を基盤として大手ファーマー＝ゴルトン社が成立した。六年後オーストリア継承戦争の開始とともに、ジョージ二世治下の軍備も格段に強化された。この時期にジョゼフ・ファーマーは他の同業者、とくにエドワード

---

David Williams, James Farmer and Samuel Galton, the reality of Gun Making

for the Board of Ordnance in the Mid-18th Century, in *Arms & Armour*, Volume 7,

No.2, 2010. p.120.

・ジヨルダンと連携し、一万五千丁以上のマスケット銃を供給する。一七四一年に彼は世を去り、息子ジェイムズ・ファーマーが引続き軍需局調達者として認可される。

相継ぐ戦乱のなかで軍需局の役割はとくに重視され、統率者である歴代の長官にはスペイン継承戦争の功労者、初代マールバラ公爵ジョン・チャーチルをはじめ、最高位の貴族が就任した。納入される兵器についても当局の審査はきわめて厳格であり、調達者の資格を付与された業者はきわめて少数である。ウィリアムスの史料調査によれば、一七二七年から一七五六年までの三十年間に銃身と発射装置の納入をつねに許されたのは、各々四企業にすぎず、戦時にのみ七企業ほどであった。彼の作成による軍需局納入一覧には、二百名に近い業者が列記されるが、その八割が軍靴など装備品の調達である。この一覧ではバーミンガムのジョゼフ・ファーマーが一七〇八年から一七四一年まで銃身と発射装置を大量したと、その相続人ジェイムズ・ファーマーが一七四一年から一七五六年まで銃身や発射装置を納入したことが判る。さらに一七五六年から一七五七年までサミエル・ゴルトンの名義で、また一七五七年から一七七四年まではファーマー「ゴルトン社の名義で銃身や発射装置が調達されたことも明記されている。なお、ここに誌された名義の変更は、後述するようにまさしくリスボン大地震による被害の余波である。

十九世紀後半の著名な人類学者フランシス・ゴルトンはファーマー「ゴルトン家も末裔であり、K・ピアソンによる彼の評伝には父祖のジョゼフ・ファーマーやロバート・ゴルトンに関する叙述も見出される。リスボンで被災したイギリス人の多くはクエーカーと伝えられるが、ピアソンもとりわけそうした精神的側面に照準を合わせている。

ロバート・ゴルトンは本来ブリストルの小間物屋であった。ファーマー家もそこで金物屋を営んだ。フレナム家はアルドゲイトの食品商であって、のちに金銀細工師となった。ブレインス家はウォツピングのタバコ屋であったが、ホワイトチャペルやラトクリフではかの品々も売り、パン屋や肉屋にもなった。大抵は自営農民か地主の息子が都会へ来て、商売を始めたが、今日でも自営農民の次男三男が同じ道を選ぶ。クエーカーが宗教的な迫害を受け

Williams, *op. cit.*, p.122.

Bailey, *op. cit.*, pp.23-24, 264, 268.

た時代にこうした事例が多く見られる。十七世紀後半にクエーカーの組織、キリスト友会の一員となるには、不倒の勇氣、ゴルトンの言葉によれば、「勇敢で質朴な一徹さ」が求められた。度重なる陥穽や服役に耐えて、商易を営み、家族を支えるには、さらに過度の勉励と耐久力が必要なのである。初期のクエーカーと同じく、近親結婚という原則で厳しく選別された彼らによって、傑出した男女を輩出する家系が造られた。

これらの時代を通して軍需局の銃器調達を牽制したのは、アジアへの拓殖と交易を統率する東インド会社とアフリカ奴隷貿易を請け受ける王立アフリカ会社である。軍需局の注文には戦時か平時かによって数量の大差があり、性能の検査もとくに厳重であった。他方貿易商社との契約は買付の数量と納入の期限も変動が小規模であり、ロンドンの同業組合との軋轢もすくない。大西洋奴隷貿易を究明したジョゼフ・イニコリの大著『アフリカ人とイギリス産業革命』には、バーミンガムの銃製造業が綿密に分析される。

大西洋市場が西ミッドランドの金属工業から受けた影響は、ひとつの産業部門、銃製造業の歴史をとおし明瞭に語りうる。この地域にあつて銃製造業は十七世紀後半に台頭した新規の産業にすぎない。しかし、十八世紀末にはとりわけバーミンガムとその近郊の主要産業となつたのである。銃製造という精密な作業のため、ここでは有能な熟練工が数多く雇われた。十九世紀の初頭ウェンズベリの兵器産業では約千人の工員が雇用され、ダルラストンでも六百人以上が働いた。バーミンガムの大手銃製造業者が一七八八年に誌した証左によれば、十八世紀後半には小型兵器の量産のため、四千人から五千人雇われたと言つ。中略

バーミンガムの主要な銃製造業者のひとり、ジョン・ウエイトリが一七八八年三月に商工会議所に提出した報告書を読めば、この産業部門における国外輸出と政府納入の比重は明らかである。「みずから営む銃製造業について熟慮すると、四千人から五千人がこの仕事で生計を立て、平時には九分どおりアフリカ貿易に支えられる。この商易がほかの商売と異質であるにもかかわらず、彼らの死活がこれに依存するからである。」「ウエイトリの付言によ

れば、戦時には最良の職人が産業部門から募られて、政府や請負企業に雇われ、年間六万丁から七万丁の銃を製造できる。「これらの製品は当然性能に優れ、驚くほど迅速に造られて、低価格で納入されるが、常時銃製造業を支える方途はアフリカ貿易にほかならぬ。」

バーミンガムの金属産業にかんする重要な史料のひとつは、同市の古文書館に蔵されるファーマー＝ゴルトン文書とされる。この史料は一七五〇年から一八三〇年に至るファーマー家とゴルトン家の記録であって、商業上の通信と個人的な手紙の手稿集成である。右に引用した著書『アフリカ人とイギリス産業革命』でもファーマー＝ゴルトン文書が参照されるが、こうした蓄積を踏まえ、両家の銃製造を主題とする論文で、ウィリアムスはつぎのように述べる。

十八世紀を通じて銃製造業者はマニファクチャーでの量産によって奴隷貿易と他の交易組織、とりわけ東インド会社付属の軍隊をも銃器の販路とした。前者はときに三角貿易、アフリカ貿易、または大西洋貿易と呼ばれ、この論文では銃販売の目的からアフリカ貿易と表現する。研究者のイニコリトリチャードはファーマー＝ゴルトン文書を調査して、バーミンガムの銃製造と金属工業にアフリカ貿易が与えた影響を論議した。アフリカ貿易からの恒常的で活発な需要は、七年戦争の直前、一七五一年から一七五四年までと一七九〇年代に最高潮に達する。これら需要の不均等によって、好況時には労働力や原料、とくに石炭の確保が肝要となる。起業家と労働者、あるいは起業家間の紛争がこうした状況のもとでしばしば生じ、一七七二年に高姿勢のゴルトンは、商売敵のトーマス・ハドレイや他の起業家と係争し、市井の暴動すら誘発した。七年戦争など戦時には政府がアフリカ貿易からの需要を抑制し、悪しき方面へ武器が売られるのを、輸出の規制によって妨害した。

国内市場で個人的消費にため求められる多くの金属製品と異なり、銃器製造は軍需局への納入と海外への調達を主眼とする特殊な産業である。したがって、各々の企業では関係諸機関との折衝が肝要であり、販売担当者の役割がとくに重視

---

Joseph E. Inkoli, *Africans and the industrial Revolution in England, a Study in International Trade and Economic Development*, Cambridge, 2002. pp.457-458.

Williams, *op. cit.*, pp.128-129.

された。たとえば、企業主のジェイムズ・ファーマーは東インド会社や王立アフリカ会社と契約する一方、輸送船の確保のためリバプールに赴き、さらには大陸の諸都市で販路の拡大を試みた。こうしたファーマーの東奔西走がイニコリの大著で綿密に追跡される。

イギリスの銃製造業者は西アフリカへ直接輸出するとは別に、アフリカ市場で銃の取引をする大陸の貿易商にも卸売をした。西アフリカで商売をするイギリスと大陸の貿易商双方に売り込むよう、もともと彼らは製造したのであろう。こうした意図はジェイムズ・ファーマーとサミエル・ゴルトンとの書簡を読めばわかる。このふたりは銃製造を共同で営み、やがてファーマー・ゴルトン社を設立するのである。一七四八年から一七四九年にかけてジェイムズ・ファーマーは、みずからの製品を販売するため、ヨーロッパ北西の主要な諸都市を廻った。一七四八年十月に彼は、フランスのダンケルクからサミエル・ゴルトンへ手紙を送り、つぎのように書いた。「バーミンガム製作のあらゆる器具が大量に売れます。．．．ここにはアフリカへの航路がふたつあり、一方はアンゴラ行き、他方は黄金海岸行きです。．．．フランスのあらゆる港町の主要な貿易商を、私は紹介して頂きました。マルチニックとサント・ドミンゴへの船便が多数あつて、大量の鉄器の輸送できます。私は雛形を送つて、大口の注文を取り付けるつもりです。」

さきに述べたピアソン著『フランシス・ゴルトン生涯、書簡、業績』には、これらの企業家について簡潔ではあるが、注目すべき記述が含まれる。ここでもピアソンはクエーカーの精神的特質に触れながら、ファーマー・ゴルトン社の事業が奴隷貿易と係わり、やがて金融業にまで変貌することを語る。

クエーカーによって大規模な商易が確立され、イギリスにおける金融業への関与もおおむね彼らの手中にあつた。ここではそうした活力、根気、勉強を語るに止める。宗派の崇高な原則を彼らがつねに遵守したようには思われない。海賊船から身を護るため、銃器を輸送する商船と連携したとの理由で、ヨークシャーのキリスト友会会員は除名され、他方ゴルトン家とファーマー家はバーミンガムに銃器製造所を設置し、大量のマスケット銃を政府



に納入した。しかも、彼らの商易は多岐に及び、リスボンでは巨大な取引を果たし、アメリカでは五万四千ホンドに相当する多数の奴隷を一度に売り渡した。サミエル・ゴルトンとテルチウス・ゴルトンの時代には、ファーマー家との共同については金融業にまで手を伸ばす。ゴルトン家をはじめ大抵の企業家は、田園での生活から町々の小売商に移り、さらには産業の新たな発展のもとで大規模な商易を企画する。こうしてクエーカーの特質が、彼らをつねに蘇生させた。

## 一、ベンジャミン・ファーマーとリスボン大地震

一七五五年十一月一日リスボンに滞在したベンジャミン・ファーマーも、みずからの被災を記録に留めた。しかし、『ティモシイ・キドヌンクの証言』と題する主要な文書は、略歴を主体とした概要のみが公開され、三十頁以上にわたる本文は稀覯本として手稿のみ個人的に所蔵される。また、ベンジャミンの執筆と誌される小冊子もあるが、後述するように筆者はこれに多少の疑念を抱き、史料とするのを躊躇している。さきに挙げた稀覯本を、残念にも筆者はいまだ閲読できないが、この文書について研究者ペイスは、著書『神の怒り』リスボン大地震一七五五年』において大要を紹介した。著書全巻をとおして彼の読解と考証には高い信頼度が感じられ、以下ベンジャミンについてはペイスの記述に依拠する。まず同年企業家ベンジャミンのリスボン到着について参照したい。

同じ頃に来た企業家ベンジャミン・ファーマーは、(南方開発局長官)トーマス・ロビンソンからカストレスに宛てた紹介状を携えていた。この書類はバーミンガムにある大手の銃製造業、ファーマー・ゴルトン社の名声を保証するものであり、同社は政府への武器調達だけでなく、インドにおける開発市場、さらには白人と黒人によるアフリカ奴隷貿易にも関与していた。この夏はファーマー家にとって快適な日々ではなかった。カボ・ヴェルデ群島で一艘の持船がポルトガル官憲に拿捕され、裁判所に返還要求を提訴したのである。リスボンにおける外国人協力者が巨額の負債を惹き起し、社主であ

Pearson, *op. cit.*, pp.31-32/

Paice, *op. cit.*, pp. xiii, 268.

る従兄ジェイムズ・ファーマーが、共同経営者サミエル・ゴルトンの資産をも秘かに担保にして、必死に弁済の方策を模索していた。

ベンジャミン・ファーマーは創業者ジョゼフ・ファーマーの甥であり、現在の社主ジェイムズ・ファーマーの従弟に当たる。かつて創業者が兼務した渉外・販売の部門を、ベンジャミン幹部として担当した。一七五五年ファーマー「ゴルトン社の事業はふたつの難題を抱え、今回のポルトガル滞在はそれらを打開するためであった。

苦難の第一は同社の持船がカボ・ヴェルデ群島で押収されたことである。この群島はアフリカ西海岸から約五七〇キロ、ブラジル北海岸へは約三千キロの大西洋に位置し、一五世紀以降ポルトガルの植民地として奴隷貿易の重要な中継地であった。こうした海運の大半はイギリス貿易商の持船が担ったが、造船には莫大な経費を必要とし、運航においても荒天や海賊の危険が付き纏った。そのため個々の商船について十人から二十人ほどの貿易商が共同で出資し、うち一名ないし二名が船舶管理人に選ばれたとされる。しかし、カボ・ヴェルデ群島で<sup>だほ</sup>拿捕されたのは、ファーマー「ゴルトン社専用の大型帆船であり、製品の銃器とときには黒人奴隷がそこに積まれたであろう。アフリカ西海岸やカボ・ヴェルデ群島へ出張したベンジャミンも、奴隷商人にマスケット銃を調達するとともに、奴隷自体の売買に関与したかも知れない。ペイスによる解説をさらに続ける。

リスボンに到着してベンジャミンは、同業のイギリス人貿易商の邸宅に寄宿した。中庭の向側を見上げると、グリーン連隊大佐の住居がある。大佐の長女がそこから見下ろして、ベンジャミンに微笑むように映じた。この地で彼が着手したのは社主ジェイムズ・ファーマー、ダヴィッド・バークレイ、リスボンの支店を支援するよう金融業者サム・モンタイトに、またポルトガル法廷への提訴を援護するようイギリス大使カストレスに懇請することであった。

Paice, *op. cit.*, p. 58.

L. M. E. Shaw, *The Anglo-Portuguese Alliance and the English Merchants in Portugal*, Aldershot, 1998. 1654-1810. pp.158-159.

Paice, *op. cit.*, p. 59.

ファーマー＝ゴルトン社を遮ぎる第二の難題は、投機による巨額の夫妻である。この新規の事業は社主ジェームズの指示によってリスボンでなされ、スコットランドの貿易商バークレイも関与したと思われる。バークレイ家は本来毛織物を取引したが、ロンドンの金匠フレアム家と姻戚関係にあり、さらに幾組かの婚姻をとおりゴルトン家とも親密であった。金匠とは貴金属商が手形を発行して貨幣を預かる金融業であり、銀行の草分けと言われる。十六世紀から現代に至るバークレイの家系総覧は、系図と略歴だけで四五〇頁を超える大冊であるが、ベンジャミンの記録に該当する記される人物はふたり見出される。バークレイ銀行創業者のひとり、ダヴィッド・バークレイ（・ド・チープサイド）がそれに当たれば、一七五五年には七三歳の高齢であるが、この家系は頑健な肉体でもよく知られていた。また、同名の息子長男ダヴィッド・バークレイ（・ド・ヤングベリ）であれば、当時二九歳の青年実業家であり、のちに北米の博愛的な経営者として令名を博し、ベンジャミン・フランクリンとも親交を結んだ。なお、重傷のまま避難する貿易商トマズ・チエイズが、王宮河港で見かけた「ジョルジュ・パークレイ（ママ バークレイ?）、右足を砕かれ、莫塵のうえに横臥する知人」も、ファーマー＝ゴルトン社と係りのある在留者かも知れない。

カープ・ヴェルデ諸島で自社の持船を押収され、返還の要求のためリスボンに来たばかりの貿易商、ベンジャミン・ファーマーは地震のとき多くの人たちと同じように、助けが来るのを期待して、住居の階段口へ避難した。中庭へ踏み込み、瓦礫の山に遮られた瞬間、わが名を呼ぶ声を聞いた。上を仰ぐと彼の隣人、連隊の中尉とその家族が梯子のない二階から跳び降りる構えである。当地で中尉の娘からいつも笑顔を示され、日々の楽しみになっていたが、いまや彼女は狂ったように瓦礫を指さし、ポルトガル語らしき言葉で激しく喚く。しかし、前方から甲高い少女の声が聞え、ファーマーにはどんな事態が判った。中庭で遊んでいたか、二階から落ちたのか、ひとりの子どもが、倒壊する壁の下敷になったのである。叫び声の方向へファーマーは踏み込み。できるだけ近くまで地面を掻き

*The Descendants of Alexander Barclay*, p.5. online.

*Gentleman's Magazine*, 1813, volume 83, february, march and avril.

p. 202.

分けた。どのように地上へ降りたのか、子どもの父と兄も現われ、ともに瓦礫を押し分けて、やがてファーマーの手に小さな顔が触れる。そのとき軽度の震動がふたたび煉瓦や石材を中庭に降らせた。やむなく咄嗟に避難したが、地震が止むとすぐに再開し、ついに少女を救い上げる。彼女になんの傷痕もなく、ファーマーは後日つぎのように回想した。「わが子を腕に抱えた父親の表情は、いかなる筆墨でも描きえず、感極まる彼の語調も、表現に尽し難い。」その朝発生した一切の困苦が、娘の救出によって父親の念頭から消えたのである。

リスボンで未曾有の災害に遭遇したベンジャミンは、危急に対処できる気力と経験を備えていた。少年の頃から俊敏と評された彼は、一七四五年スコットランドにおけるカロデンの戦いに国王軍のひとりとして出陣した。名誉革命を受け入れず、スチュアート朝の復活を目差す反乱はここで終結したのである。その後企業家に転じたベンジャミンは、旅先のポルトガルで山賊に人質として拉致され、生命を危くされたが、高貴な風采の人士に救護された。大地震以前の災難と思われる。今回彼が寄宿し、少女を救出した地点は、おそらくリスボンの繁華街、大商人や金融業者が多く住む鉄柵新町あたりではなからうか。ペイスによる概要にはさらに市中の凄惨な様相が誌される。

昼下りバイシャ地区の大半は火焰に包まれていた。ファーマーは住居近くの小さな広場でも埋もれた人たちを救出し、もう立ち去ってもよいと判断した。沈痛な避難者の流れとともに、とぼとぼと北の方へ歩きつつ、彼は周りを見詰めた。だれの目もみな凝視しながらにもものも捉えず、口は広く開いて不気味な呻きを発し、髪は乱れて逆立ちしている。そうした雰囲気のなかでファーマーは自身もまた同じ恐怖に憑かれたように震えた。

リスボンの震災は多くの企業家を破滅に追い込んだ。家具製造業者ジョゼフ・マイはすべての現金と貯蓄を喪失し、弟から四千ポンドも借りる羽目になった。ワインと織物の貿易商、ドンカン・クラークは七〇〇ポンドの商品と一八〇ポ

---

Paice, *op. cit.*, pp. 73-74.

*FARMER, Benjamin'Some account of Timothy Quidnunc the author, by the Editor. online*  
Paice, *op. cit.*, pp. 109-110.

ドの現金を護ったが、二千ポンドの負債に至り、復帰を諦めた。また噂によれば、ブラジル産ダイヤモンドの取引業者、大手のプリストウ・ワード社は膨大な現金貯蔵を寸毫も防禦できなかった。同じく大手であるペリー・メリツシュ・デヴィスム社のジェラルド・デヴィスムはバイシャ地区の烈火を潜って、ノーヴァ・ド・アルマダ街の経理事務所へ突進を試みたが、二度とも失敗したと巷間で囁かれる。そして、ベンジャミン・ファーマーが自社への支援を熱望した金融業者サム・モンタイグートは、すべてを喪失し、もはや何事も期待できないと述べた。以上のように実業界の被害を列挙するなかで、ペイスはファーマー・ゴルトン社についても言及する。

「神慮による鉄槌が」とウエルトシエア州の毛織物貿易商、ジョージ・ワNSEYは日記に誌した。「我ら一家を打ち砕き、業務を破滅に追い込んだことか。」彼はリスボンに置いた商品と千ポンドもの債権を失っただけでなく、兄のウィリアム、貿易商投資協会理事のため債務を背負ったのである。この兄も震災によって二万三千ポンドの債権をほとんど棒に振った。ロンドン在住のダニエル・ホイサードが破産したと聞いて、すでに積荷した四万五千ポンドの毛織物について売却の契約を無効にしたいと、ふたりの貿易商が南方開発局幹事ヘンリー・フォクスに訴えたが、徒労に終わった。そして、ベンジャミンの従兄、銃製造業者ジェイムズ・ファーマーについては、すでに一七五五年の夏金融上の苦境にあつて、このとき決定的な打撃を受け、債権者と調停を余儀なくされた。

つとに一七五〇年セバステイアン・カルヴァルホ（のちのポンバル侯爵）を宰相に登用したポルトガル王権は、自国産業の育成を重視し、イギリス勢力への抵抗を強化しつつあった。こうした路線の第一はブラジル貿易について英国商館から主導権を奪還し、自国民による特権会社を確立することである。金、砂糖、タバコなど主要な産物の取引が厳しく査閲され、一七五五年六月には商船隊をも有する貿易機関、グラン・パラ・マラニヤン会社が設立された。リスボンにおけるジェイムズ・ファーマーの投機破綻とカボ・ヴェルデ群島における大型帆船の拿

Paice, *op. cit.*, pp. 126-127.

*ibid.*, pp. 178-179.

捕は、おそらくポンバル政権の強硬な路線と係りがある。ウィリアムスの論文「ジェイムズ・ファーマーとサミエル・ゴルトン」にはリスボン大地震の余波が過ぎのように記載される。

一七五五年はジェイムズとサミエルにとって重大な年となった。諸国間の対立は七年戦争へと発展し、銃製造業者に繁栄の契機を与えたが、同年リスボンで投機に失敗したため、ジェイムズの経営基盤が完全に崩れた。その結果翌年三月に両者の提携が解消された。以後数カ月金融的な処理に多大の労苦が費やされたことが、彼らの書簡から読み取れる。こうしてサミエル・ゴルトンが企業の主導権を掌握し、業務の詳細を逐一手帳に記録した。

震災によつてファーマー家は致命的な打撃を受けた。ジェイムズは銃製造業から手を引き、軍需局への武器調達についても翌年サミエル・ゴルトンに名義が変更される。しかし、大地震で多大の損害を受けたものの、多くのイギリス人貿易商がリスボンでやがて業務を再開した。衣料品や建築資材の大幅な需要が彼らを活気づけたとも言われる。ベンジャミン・ファーマーの責務である帆船拿捕への抗議も裁判が長期化し、彼もなお数年しばしばこの地に滞在した。

震災からの復興を契機にポルトガルの社会は、歴史的な転換を遂げつつあった。リスボンの大規模な都市改造に着手した宰相ポンバルは、自国産業の保護・育成や啓蒙主義的な文化政策を推進するとともに、改革に批判的な政治勢力と宗教団体に容赦なく抑圧を強める。一七五八年国王への暗殺未遂事件が摘発され、最高位の貴族アヴェイロ公爵らが火刑に処せられた。これによつてポンバルの独裁体制が以後二〇年間不動のものとなる。処刑の日おりしもリスボンにいたベンジャミンは、震災の日と同じように底知れぬ恐怖に襲われた。

一七五九年六人の貴族と五人の平民が死刑の判決を受け、翌朝うち十人が市内を引き回されて牢獄からベレン王宮前の広場に移された。寒冷にもかかわらず八時三十分を集った膨大な群衆―市民全員とも七万人とも言われる―が、大地震以降もつと噂の高い出来事を目のあたりにした。 中略

Kenneth Maxwell, *Pombal, Paradox of the Enlightenment*, Cambridge, 1995, pp.56, 59.

William, *op. cit.*, p125.

Paice, *op.cit.*, p.182.

再三リスボンに來たベンジャミン・ファーマーも、死刑執行の現場を目撃したわけではない。カープ・ヴェルデ諸島での押収に補償を引続き請求し、救済の望みも皆無ではなかった。処刑の日彼は丘陵への散歩の帰り道、ベルムから首都へ戻る数多の群衆に出会った。群衆の歩みは遅く、眼差しは地を離れない。完全な沈黙が支配した。溜息ためいきと足音のほかほかにも聞えない。憤怒ではなく、底知れぬ暗鬱にだれの面持も覆われている。ファーマーはその光景に深い衝撃を受け、同じように暗澹たる情念を体験した過去を思いだした。かの大地震のとき、新造の埠頭が沈没し、首都低地帯も海嘯が脅かされたとき、同じような様相で群衆は丘陵へ退避したのである。

#### 【付記】

小冊子「リスボン大地震に関する貿易商ファーマーの証言」について

以上に述べたとおり貿易商ファーマーの被災は、興味深い歴史事象を内包するが、彼自身の地震証言を把握できる史料は入手困難である。しかし、ファーマーの証言と銘記した小冊子が震災の翌年ボストンで発売された。この記録の閲覧も容易ではないが、数少ない所蔵図書館、オーストラリアの公立図書館に依頼した筆者は、郵送された複写を手にし、著しく落胆した。

まずその標題を訳出する。『リスボンにおける最近の凄惨な地震に関するふたつ綿密な証言―これまでのいかなる刊行物よりも詳細な記録』。三つの部分から構成され、第一は「壊滅した都市からパケット定期船でフルマウスに着いた貿易商ファーマーの証言」であり、その第二は「同じく定期船で到着したある貴紳の口述記録である。そして、これらに加えて大地震直前のリスボン観光案内が転載されている。

---

Paice, *op. cit.*, p. 207, 209.

Pearson, *op. cit.*, p. 40.

Two very Circumstantial ACCOUNTS of the late dreadful Earthquake at Lisbon: Giving a more particular Relation of that Event than any hitherto publish'd, the First Drawn up by Mr. FARMER, a Merchant, of undoubted Veracity, who came over from the ruined City in the Expedition Packet-Boat, just arrived at Falmouth. the Second . . . , Boston 1756.

収録された証言第一には、たとえば被災した市街がつぎのように叙述される。  
「街路を進むや、多くの商店と店主が瓦礫に埋もれていた。悲鳴をあげつつ、瓦礫から這い出す者もあり、半身埋もれた者、四肢を砕かれながら、孤立無援な者もある。いささかも気付かず、憐憫の情もなく、人波は通過するのみである。」  
こうしたファーマーの記録は五頁にわたるが、すべて地震と災害の一般的な報告であり、執筆者自身の体験や周辺の異常な情景は書かれていない。

リスボン大地震の衝撃は劇烈であり、被災者の脳裏に深い刻印を与えたはずである。それゆえにイギリスの外交使節やローマ教皇大使は、公文書においてすら自己の体験に記述の大半を当てた。この小冊子においてもある貴紳による証言第二では、まず地震発生に驚愕する自身について語られる。したがって、実際に証言第一がファーマーによって書かれたか否か、筆者は一抹の疑義を抱く。綿密な研究者であるエドワード・ペイスも、文献一覧に書名を記載するに止め、この小冊子からの引証を一度も行っていない。なんらかの理由によってファーマーが一般的な被災報告を綴ったとしても、とくにそこから摂取できる事柄は皆無に近いからである。

初出 二〇一四年七月十六日